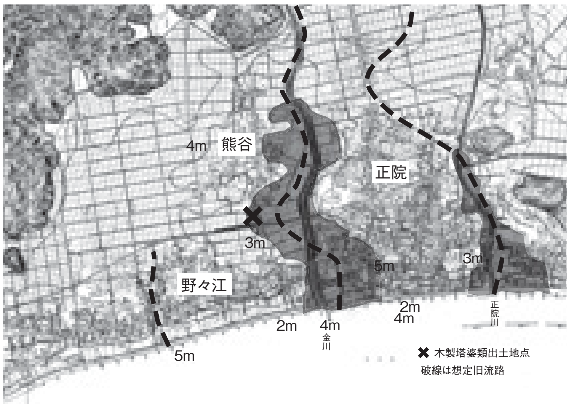
珠洲市野々江本江寺遺跡出土木製塔婆類について

（すずしののえほんこうじ）

伊藤　雅文（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

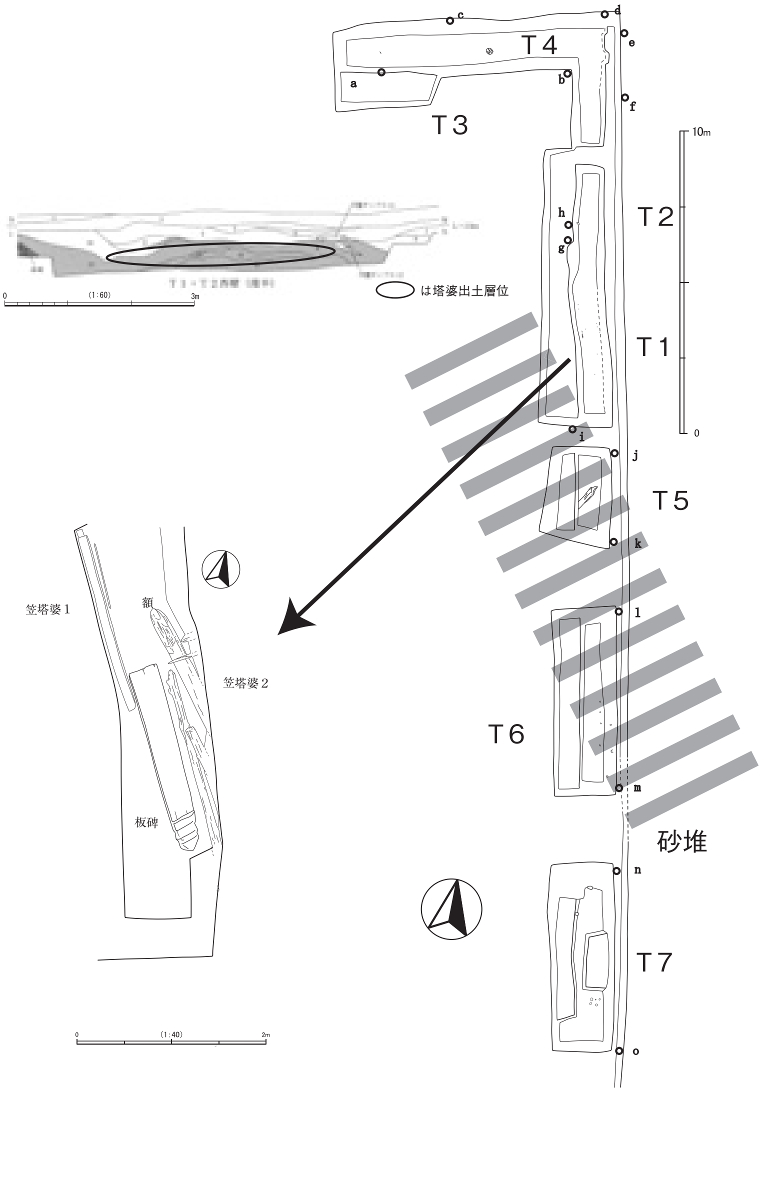
はじめに：野々江本江寺遺跡は、石川県珠洲市野々江町・熊野町に所在し、金川が作る沖積平野の標高２～４mに位置する。発掘調査は平成18・19年度に実施し、19年度の調査区から木製板碑１基、木製笠塔婆２基が出土した。これらの放射性炭素同位体年代で11世紀中ごろの年代が測定され、上限年代である。珠洲焼の年代も概ね12世紀中ごろ以降となっていることから、平安時代末から鎌倉時代に作られた「餓鬼草紙」などに描かれた木製塔婆の実在を明らかにする。



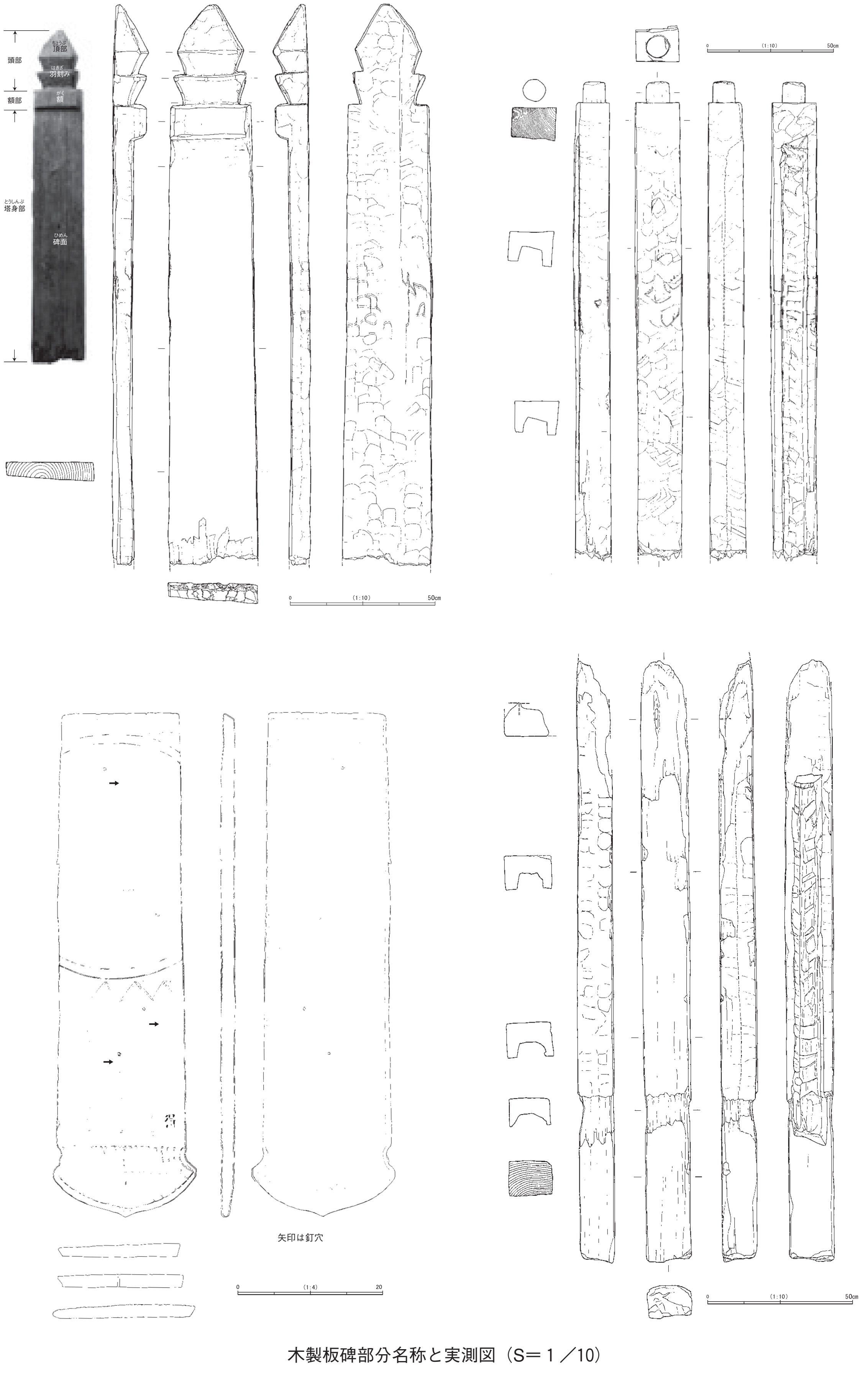
野々江本江寺遺跡周辺地形復元（S＝１／30,000）

出土：木製塔婆類の出土地点は金川の蛇行部分にあたり、低湿な地勢である。狭長なトレンチ調査により、地形の把握は困難だが、推定幅約4.5m、推定高約0.5mの砂土を中心とした高まりが、北西―南東方向に存在する（砂堆と仮称）。

木製塔婆類はこの砂堆の西に接し、笠塔婆１が額を東に向け、板碑表を上に向けて基部を接する状況で出土し、さらに笠塔婆２が東接する。これらはほぼ水平状態で出土しており、意図的な埋置である。特に、笠塔婆１の額は竿幅と同じくするように両側が鋭利な刃物で切断されており、有機物で竿と緊縛されていたと推定している。出土地点は他にも木製品が出土していることから、不用物の廃棄場所となっていたと思われる。



木製塔婆：木製板碑１基、木製笠塔婆２基でそのうちの１基に額が付属していた。発掘調査報告書の考察で時枝務氏が論じたように、塔婆の木製品ではなく木製の

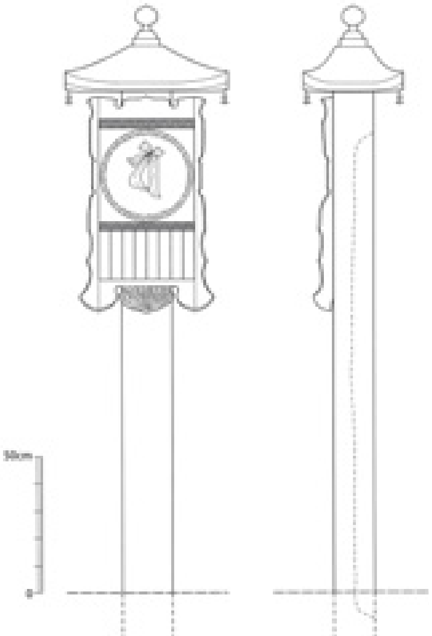


木製板碑部分名称と実測図（S＝１／10）

塔婆であり、石製塔婆のプロトタイプでもある。このため、「木製」の文字を省略する。

板碑：長193cm、幅23～30.5cmで、ヒノキ材から作られている。最外年輪の年代がAMSによる放射性炭素年代測定で1041～1066年としめされた。頭部から額部にかけて二段羽刻み状に造形され、下端は切断されている。

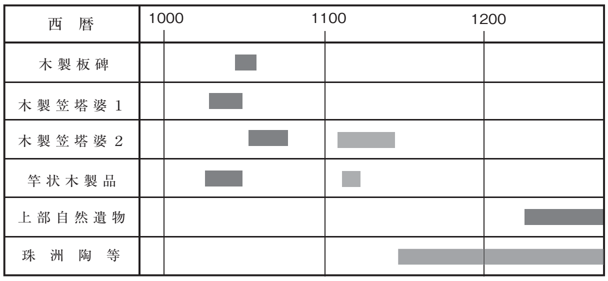
笠塔婆竿部：長２m前後、幅15～18cm、厚11～13cmで、スギ材である。背面に幅約10cmの溝状の彫込みがあり、上端に笠に結合するためのホゾがある。１本には樹立による腐朽痕がある。年代測定では竿１が1032～1048年、竿２が1054～1047年および1123～1141年となった。


笠塔婆想定復元図

笠塔婆額部：長69.5cm、幅約17cmでアスナロ材で、両側が切断されている。円相内に「バン」が浅く掘り込まれ、黒く彩色されていたようだ。その下の区画には文字痕があり「得」のみ判読できた。竿とは鉄釘で緊結された。右図は、報告書における狭川真一氏の想定復原である。

同時に出土した竿状木製品（クリ材）の年代は1025～1047年、1114～1121年である一方、これらよりも少し上にある木材では13世紀前から中頃であるように、塔婆類との年代的な開きは100年以上となり不自然である。塔婆類のサンプル採取位置が現状で最外縁にあるが、その外に数十年分の年輪の存在が予想されるほか、笠塔婆竿が建築材の転用の可能性も想定されることより、概ね12世紀代に造立されたと考えられる。ただし、11世紀代まで遡上の可能性を否定しない。

まとめ：板碑が高価なヒノキ材から作られ都からの搬入品であろう。一方笠塔婆は地元用材で作られ、塔婆造立の思想が都から地方に移入されたものである。



出土遺物の年代整理

調査地点からこれらの造立場所を知る手掛かりはないが、屋敷墓の可能性はないが、狭川氏は報告書で付近に寺および墓地の存在を想定している。

奥能登である珠洲地域では、康治２年（1143）に若山荘が皇嘉門院に寄進され、広大な荘園が成立した。調査地点は若山荘と東に広がる国衙正院領との境界に位置する。赤阪憲雄氏による境界は「点」として存在し（「境界の発生」2002)、窪田涼子氏はパブリックと表現する（「描かれた塔婆」1995)。境界における廃棄・祭祀行為としても認識できよう。

康治２年の寄進時は、
外浦の西海馬繰浦と
西海大谷浦は若山荘
に含まれていない。

若山荘領域